【研究について】

アール・ブリュットとシュルレアリスムの重なるところ

長谷川晶子

各分野の最新の研究動向をまとめたこれまでの「研究レヴュー」より自由に、個人の研究内容や参加したイベントについて執筆してほしいというお誘いをいただいたので、ここでは筆者が近年関心を寄せているアール・ブリュットとシュルレアリスムの研究を紹介させていただくことにしたい。

水声社の「シュルレアリスムの 25 時」という知られざるシュルレアリストたちのモノグラフを集成したシリーズで、北フランス出身の霊媒画家フルーリ・ジョゼフ・クレパンについて執筆する機会をいただいた[1]。クレパンは、アール・ブリュットの理論家ジャン・デュビュッフェが発見し、シュルレアリスムの理論家アンドレ・ブルトンが評価した画家である。そもそも筆者がこの画家に興味を抱くようになったきっかけは、ふたりが共通して論考を残した唯一の芸術家であるクレパンをめぐる見解の相違を DEA 論文（2001 年、ジュネーヴ大学に提出）で取りあげたことにある。ここ数年間は、このクレパンという画家の生涯を明らかにするために北フランスで実地調査を行いながら、アール・ブリュット研究とシュルレアリスム研究の文献に目を通してきた。

ここでふたつの運動それぞれの網羅的な書誌を紹介することは不可能であるし、シュルレアリスム研究に関してはすでに優れた先行研究レヴューがある[2]。そこで本稿では、筆者の研究と関係する限りでのアール・ブリュットとシュルレアリスムそれぞれの研究の背景、主要な研究動向、研究拠点、アーカイヴ、代表的な展覧会やシンポジウムを押さえたうえで、ふたつの芸術の交点に位置する霊媒芸術に関する研究の最近の動向を簡潔に紹介したい。

＊＊＊

アール・ブリュット（art brut）は、文学研究者のあいだではあまり耳慣れない言葉かもしれない。そこでまず、この芸術について簡単に説明しておきたい。アール・ブリュットとは霊媒、精神病患者、囚人など、専門的な教育を受けずに衝動的に創作する独学者たちの作品の総称である。第二次世界大戦の閉塞感から解放されたフランスで、画家として頭角をあらわしはじめていたジャン・デュビュッフェが、これらのアカデミズムから外れたイレギュラーな創作群を「アール・ブリュット」と名づけ、擁護するために収集することを

[1] 長谷川晶子『フルーリ・ジョゼフ・クレパン　日常の魔術』水声社、2018 年。

[2] 1975 年以降盛んになったシュルレアリスムの研究を辿る批評的書誌として、「シュルレアリスム研究の 20 年――批評的書誌」（鈴木雅雄編『シュルレアリスムの射程――言語・無意識・複数性』せりか書房、1998 年、1-43 ページ）や、1990 年以降の重要書誌を補足した鈴木雅雄ほか「シュルレアリスムをめぐる言説、その現在　関連資料紹介」（『水声通信』9 月／10 月合併号・特集「思想史のなかのシュルレアリスム」、2007 年、148-159 ページ）がある。

提案した。1947 年にアール・ブリュット協会を設立する際はブルトンやジャン・ポーランにも協力を要請している。

20 世紀初頭からマルセル・レジャやハンス・プリンツホルンら医師たちが収集してきた「狂人の芸術（art des fous）」[3]、シュルレアリストたちが表現の新境地として賞賛した「霊媒芸術（art médiumnique）」を含むアール・ブリュットは、文化の周縁に位置するとされる。デュビュッフェは、文化的な場で生まれる芸術とその外で生まれるアール・ブリュットという二項対立で芸術を二分し、前者を偽物と断罪、後者を本物として評価した。前衛芸術も含むこれまでの美術界のシステムを全否定しようというデュビュッフェの大胆な提案は、芸術家たちのあいだで一定の支持を得たものの、研究者や一般大衆に受け入れられるまでには時間を要した。1967 年のパリの国立装飾美術館における展覧会の成功を経て、1972 年以降英語圏で「アウトサイダー・アート（Outsider art）」（イギリスの批評家ロジャー・カーディナルによる命名[4]）と呼ばれるようになったアール・ブリュットは、日本では 1993 年の「パラレル・ヴィジョン　20 世紀美術とアウトサイダー・アート」展（世田谷美術館）以降、一般に存在が認められるようになった。

デュビュッフェがアール・ブリュットという呼称を自分の収集物以外にあてはめることを禁じたために、アウトサイダー・アートのほかに、フランスでは「クレアシオン・フランシュ（Création Franche）」や「アール・サンギュリエ（arts singuliers）」、アメリカでは「フォーク・アート（Folk art）」や「セルフ＝トート・アート（Self-Taught Art）」、日本では「エイブル・アート（Able art）」や「限界芸術」などの新しい呼び名や芸術のあり方が提案されたことも[5]、この芸術のカバーする領域が捉えがたいという事実をよく示している。後述するように英語圏ではアウトサイダー・アートという語が広く普及しているが、日本ではアール・ブリュットとアウトサイダー・アートのいずれも用いられる傾向がある。

1976 年にスイスのローザンヌにジャン・デュビュッフェの収集物を受け入れるために創設されたアール・ブリュット・コレクション（Collection de l’Art Brut）が、研究の一大拠点となっている。デュビュッフェが寄贈した作品は 5000 点にのぼるが、それ以降もアール・ブリュット・コレクションは作品の収集を継続しており、その資料館には予約をすれば自由にアクセスして資料を閲覧できる。2001 年まで館長を務めたローザンヌ大学の美術史家ミシェル・テヴォーは『アール・ブリュット[6]』（1975 年）をはじめとした数多くの著書の

---

[3] Marcel Réja, *L’Art chez les fous*, Paris, Société du Mercure de France, 1907 (nouvelle édition, Paris, l’Harmattan, 2000) ; Hans Prinzhorn, *Bildnerei der Geisteskranken : ein Beitrag zur Psychologie und Psychopathologie der Gestaltung*, Berlin, Springer-Verlag, 1922（ハンス・プリンツホルン『精神病者はなにを創造したのか』林晶、ティル・ファンゴア訳、京都、ミネルヴァ書房、2014 年）。

[4] Roger Cardinal, *Outsider art*, London, Studio Vista, 1972.

[5] « Création Franche »の提案者は芸術家ジェラール・サンドレ、« arts singuliers »はパリ市近代美術館、「エイブル・アート」は具体芸術の嶋本昭三、「限界芸術」は哲学者の鶴見俊輔である。それぞれが対象とする領域は大きく重なるが、コンセプトは異なる。

[6] Michel Thévoz, *L’Art brut*, Genève, Skira, 1975 (nouvelle édition, 1980)（ミシェル・テヴォー『ア

なかで、文化的な芸術とは相容れないアール・ブリュットの姿のみならず、精神医学と社会体制の既成概念を批判する力をもつこの芸術の側面を浮き彫りにした。2001 年以降テヴォーの後を継いで館長に就任したのは、リュシエンヌ・ペリーである。彼女が 1997 年に出版した『アール・ブリュット[7]』はドイツ語、英語に訳され、2016 年にも増補版が出版されている。ペリーが館長になった 2000 年頃から、ジャン・デュビュッフェの定義した狭義の「アール・ブリュット」に対する見直しが少しずつ行われ、アール・ブリュットを「開く」試みがなされるようになる。ペリーはインド、中国、日本、アフリカのアール・ブリュットを発掘し、世界に紹介した。2010 年の「アール・ブリュット・ジャポネ」展（パリのアル・サン・ピエール美術館）には 12 万人の来場者があったとされるが、日本人の創作がヨーロッパに受け入れられる土台を準備したのがペリーだったともいえる。2013 年にサラ・ロンバルディが館長に就任した後は、ジャン・デュビュッフェの編纂した機関誌『アール・ブリュット年鑑』の復刻版[8]（2016 年）や『ジャン・デュビュッフェのアール・ブリュット[9]』（2016 年）を刊行するなど、原点であるデュビュッフェの試みを客観的に検証する試みがなされている。

フランスにおけるアール・ブリュット研究の中心地は、北フランスのリール近郊のヴィルヌーヴ・ダスクにあるリール・メトロポール近現代美術とアール・ブリュットの美術館（通称 LaM）である。1982 年にマドレーヌ・ロンメルが創設したアラシーヌ・コレクション（2005 年に閉鎖）を 1999 年に受け入れ、現在、170 名の作り手による 3500 作品が所蔵され、400 点以上が常設展示されている。この美術館に併設されたドミニク・ボゾ図書館では、貴重な資料の数々が自由に閲覧できる。この美術館のアール・ブリュット部門の責任者であるサヴィーヌ・フォーパンの指示のもと、積極的にデジタル・アーカイヴを作成、公開している。筆者も、クレパンに関連する拙論を執筆する際には、重要な資料のほとんどをローザンヌとリールで調査した。

ローザンヌとリール以外にも、ナントの国立近代美術館リュ・ユニックや、パリ近郊ヌイイ＝シュル＝マルヌの非営利研究機関 ABCD なども存在する[10]。ちなみにパリのアル・サン・ピエール美術館は、アール・ブリュットの企画展を定期的に開催しているが、所蔵品

ール・ブリュット　野生芸術の神髄』杉村昌昭訳、京都、人文書院、2017 年）。それ以外にも、Thévoz, *Louis Soutter*, Lausanne, Éditions Rencontre, 1970 ; Thévoz, *Dubuffet*, Genève, Skira, 1986 ; Thévoz, *Le miroir infidèle*, Paris, Éditions de minuit, 1996（ミシェル・テヴォー『不実なる鏡――絵画・ラカン・精神病』岡田温司・青山勝訳、京都、人文書院、1999 年）などがある。

[7] Lucienne Peiry, *L'Art Brut*, Paris, Flammarion, 1997 (édition revue et augmentée, Paris, Flammarion, 2016).

[8] Jean Dubuffet, *Almanach de l'art brut : fac-similé*, édition établie et présentée par Sarah Lombardi et Baptiste Brun, en collaboration avec Vincent Monod, Milan, 5 Continents éditions, 2016.

[9] *L'art brut de Jean Dubuffet : aux origines de la collection*, catalogue sous la direction de Sarah Lombardi, Paris, Flammarion, 2016.

[10] ABCD, *Une collection d'Art Brut*, Arles, Actes Sud, 2000 ; Bruno Decharme, *Art brut : collection ABCD Bruno Decharme*, Paris, Flammarion, 2014.

を持たない。中央集権的なものを嫌悪するデュビュッフェの意思を反映してか、あるいは主流とは決して相いれようとしないアール・ブリュット自体の性質のせいか、アール・ブリュットのコレクションは地方に位置し、そのため研究もその周辺で進展する傾向がみられる。

フランス語圏以外でもアール・ブリュットの研究は進んでいる。なかでも、ロンドン、シドニー、シカゴ、ハイデルベルクの動向は無視できない。ロンドンにはジョン・メイズルの発行する専門雑誌『ロウ・ヴィジョン』（1989 年創刊）がある。筆者も京都のギャルリー宮脇で開催された「アール・ブリュット　〈境界〉のない世界へ[11]」（2015 年）の展覧会評をこの雑誌に掲載したことがある[12]。シドニーではシドニー大学のコリン・ローデスが 2008 年に独学者とアウトサイダーの芸術の研究とコレクションを設立。シカゴで 1999 年に設立された、直観的アートとアウトサイダー・アートのためのセンターは、ヘンリー・ダーガーの作品を展示するだけでなく、彼の住居兼アトリエを再現している。ハイデルベルク大学の精神科に勤務した医師ハンス・プリンツホルンの集めた 50000 点以上の収集品を所蔵するプリンツホルン・コレクションでは、2015 年の「靴の中敷きのなかの驚異[13]」展をはじめアール・ブリュットに関する展覧会が頻繁に開催されている。

日本では、2000 年にリール・メトロポール近現代美術館の収蔵品を紹介する展覧会「突き上げる創造力　アール・ブリュット＝生の芸術」（軽井沢メルシャン美術館）が開催された際に、重要な研究が相次いで出版された[14]。近年では、審美的な観点だけでなく、社会福祉の観点からも論じた研究がなされ[15]、アール・ブリュットの周知が一層進んでいる。

2017 年には、アル・サン・ピエール美術館館長マルティーヌ・リュザルディ、スイスはザンクト・ガレンにあるラガーハウス博物館共同代表のモニカ・クフェルト、シドニー大学のコリン・ローデス、プリンツホルン・コレクションのトーマス・レスケなどそうそうたるメンバーを招いた大々的な国際フォーラム「アール・ブリュット国際フォーラム」が滋賀県のびわ湖大津プリンスホテルで開催された[16]。滋賀県には、知的障害児等の入所・教育・医療を行う近江学園（1946 年創設）や近江八幡のボーダレス・アート・ミュージアム

---

[11] この展覧会に際して、巖谷國士による講演「アール・ブリュット――境界のない世界」（2015 年 4 月 26 日、ギャルリー宮脇）が行われた。

[12] Akiko Hasegawa, « Art brut, towards a land without "borders" », *Raw Vision*, n° 86, 2015, p. 70-71.

[13] *Das Wunder in der Schuheinlegesohle, Werke aus der Sammlung Prinzhorn*, Berlin, Verbrecher Verlag, 2014.

[14] 『アウトサイダー・アート』求龍堂、2000 年；服部正『アウトサイダー・アート　現代美術が忘れた「芸術」』光文社、2003 年；谷川晃一『絵は誰でも描ける』生活人新書、2003 年。

[15] 保坂健二朗監修『アール・ブリュット　アート　日本』平凡社、2013 年；川井田祥子『障害者の芸術表現　共生的なまちづくりにむけて』水曜社、2013 年。

[16] 2017 年 2 月 10 日～12 日に開催。その後、2018 年には「アール・ブリュット国際フォーラム」（2 月 9 日～11 日）、2019 年には「アール・ブリュットネットワークフォーラム 2019」（2 月 10 日）が同じ場所で開催されている。

NO-MA（2004 年に開館）などが存在し、日本のアール・ブリュットの制作、紹介において先進的といえる。現在、滋賀県立美術館では、アール・ブリュットを含む新生美術館の構想が進められており、今後アール・ブリュット研究の拠点になることが期待される。

美術批評家の椹木野衣は、ハイアートとサブカルチャーの地位の逆転現象が起きている現代美術の現状を、アール・ブリュットというサブカルチャーの定着によって説明している[17]。実際、アール・ブリュットを代表するヘンリー・ダーガー（原美術館、2007 年；パリ市立近代美術館、2015 年[18]）やアドルフ・ヴェルフリ（兵庫県立美術館、2017 年[19]）が現代芸術家として紹介されるようになってきている。現代芸術におけるアール・ブリュットの位置や、福祉や地域創生との関連におけるアール・ブリュットの問題は、今後益々議論されることになるだろう。

＊＊＊

シュルレアリスムとは、第一次世界大戦直後にアンドレ・ブルトンやルイ・アラゴンらパリの作家・芸術家が提唱した文学・芸術の運動で、想像力に全幅の信頼を寄せ、当時軽視されていた夢、狂気、驚異やエロスを再検討することで、現実の見方の変革、ひいては世界そのものの変革が可能になると唱えた。公式には運動は 1924 年から 1969 年にかけて、世界中のさまざまな都市で文学・絵画・映画・彫刻・演劇などのジャンルで展開したが、現在でもその精神を受け継いで活動するグループや個人が存在する。

シュルレアリスムは作品の審美的価値よりも生き方の自由を重視したため、シュルレアリストたちは運動が歴史化されたり、対象化されたりすることに反発しつづけた。それゆえ、同時代の研究者や文学者は、モヌロやアルキエをはじめシュルレアリスムを対象化することなくそれを生きながら研究を進めようとする傾向が強かった[20]。シュルレアリスム研究が質量ともに本格化したのは、理論的側面を支えたブルトンの死（1966 年）から少し経った、1970 年代半ば以降のことである。1970 年代から 90 年代までのシュルレアリスム研究の動向については鈴木雅雄「解放と変形――シュルレアリスム研究の現在[21]」が詳しいため、ここではそれ以降を中心に、代表的な研究のいくつかを紹介したい。

70 年代半ばに、トゥール大学のマルグリット・ボネが膨大な一次資料に基づいた記念碑

---

[17] 椹木野衣『アウトサイダー・アート入門』幻冬舎、2015 年。

[18] 『ヘンリー・ダーガー 少女たちの戦いの物語　夢の楽園』原美術館、2007 年；*Henry Darger : 1892-1973 : exposition*, Paris, Musée d'art moderne de la Ville de Paris, 2015.

[19] 『アドルフ・ヴェルフリ　二萬五千頁の王国』国書刊行会、2017 年。

[20] Jules Monnerot, *La Poésie moderne et le sacré*, Paris, Gallimard, 1945（ジュール・モヌロ『超現実と聖なるもの』有田忠郎訳、牧神社、1974 年）; Ferdinand Alquié, *Philosophie du surréalisme*, Paris, Flammarion, 1955（フェルディナン・アルキエ『シュルレアリスムの哲学』巖谷國士・内田洋訳、河出書房新社、1975 年）。1966 年にはアルキエの主催で、多くのシュルレアリストたちが参加したシンポジウム「シュルレアリスムの 10 日間」が行われた。このシンポジウムの論文集として Alquié, *Entretiens sur le surréalisme, Colloque de la Cerigy-la-salle (1966)*, Paris, Mouton, 1968 が刊行されている。

[21] 鈴木雅雄編『シュルレアリスムの射程』、6-24 ページ。

的な著作『アンドレ・ブルトン、シュルレアリスムの冒険の誕生[22]』（1975 年）を刊行し、アカデミックなブルトン研究およびシュルレアリスム研究が活性化する。ボネはさらにプレイヤード版『アンドレ・ブルトン全集』を編纂することになるが[23]、ボネの支持を得て、ジャクリーヌ・シェニウ＝ジャンドロンがシュルレアリスムに特化した研究グループ（現代文学・美術研究）を 1970 年代にフランス国立科学研究センター（CNRS）内に立ちあげた。このグループはシュルレアリスムの運動の全体を捉えるために、文学・美学に限らず、精神分析・人類学・言語学・現象学などの人文諸科学の理論的な言説を用いることを提案した。シェニウ＝ジャンドロンが編纂した機関誌『プレーヌ・マルジュ（*Pleine marge*）』は、創刊した 1985 年から終刊する 2009 年までに年に二回刊行、計 50 号が刊行された。彼女を中心としたヨーロッパ・南米・北米・日本の研究者たちは積極的にシンポジウムを開催し、高度な議論を展開した[24]。シェニウ＝ジャンドロン自身による主要な研究としては『シュルレアリスムと小説』（1983 年）、『シュルレアリスム』（1984 年）がある[25]。2017 年にはフランス国立図書館と国立美術史研究所（INHA）の国際シンポジウム「ブルトン後のブルトン――シュルレアリスムの複数の哲学（Breton après Breton. Philosophies du surréalisme）」を主催した。

アンリ・ベアールを中心とするパリ第 3 大学のグループが、研究雑誌『メリュジーヌ（*Mélusine*）』を創刊したのは 1980 年のことである。ベアールは、トリスタン・ツァラやロジェ・ヴィトラックの全集などの編纂も行いながら、伝記的研究『アンドレ・ブルトン伝[26]』（1990 年）を発表し、近年では『アンドレ・ブルトン事典[27]』（2013 年）を編纂した。さら

---

[22] Marguerite Bonnet, *André Breton, naissance de l'aventure surréaliste*, Paris, José Corti, 1975.

[23] プレイヤード版『アンドレ・ブルトン全集』全 4 巻のうち、第 3 巻の編纂途中でボネが亡くなったために完結が遅れた。ボネを継いだのはソルボンヌ大学のエティエンヌ＝アラン・ユベールである。第 1 巻は 1988 年、第 2 巻は 1992 年、第 3 巻は 1999 年、そして第 4 巻は 2008 年に刊行された。

[24] その成果は論文集の形で出版されている。*Du Surréalisme et du plaisir*, textes réunis par Jacqueline Chénieux-Gendron, Paris, José Corti, 1987 ; *L'Objet au défi*, textes réunis par Chénieux-Gendron et Marie-Claire Dumas, Paris, Presses universitaires de France, 1987 ; *Pensée mythique et surréalisme*, textes réunis par Chénieux-Gendron et Yves Vadé, Paris, Lachenal & Ritter, 1996 ; *Pensée de l'expérience, travail de l'expérimentation au sein des surréalismes et des avant-gardes en Europe*, textes réunis par Chénieux-Gendron et Myriam Bloedé, Leuven, Peeters, 2005 など。

[25] Chénieux-Gendron, *Le surréalisme et le roman, 1922-1950*, Lausanne, L'Âge d'homme, 1983 ; Chénieux-Gendron, *Le Surréalisme*, Paris, Presses universitaires de France, 1984（ジャクリーヌ・シェニウ＝ジャンドロン『シュルレアリスム』星埜守之・鈴木雅雄訳、京都、人文書院、1997 年）。2014 年に『シュルレアリスムと小説』の改訂版 *Inventer le réel, le surréalisme et le roman, 1922-1950*、そして『シュルレアリスム』の改訂版 *Les surréalismes, l'esprit et l'histoire* がオノレ・シャンピオン社から出版されている。シェニウ＝ジャンドロンが雑誌や論集に発表した論文のなかから代表的なものを邦訳した論文集『シュルレアリスム、あるいは作動するエニグマ』（齋藤哲也編、水声社、2015 年）もある。

[26] Henri Béhar, *André Breton, le grand indésirable*, Paris, Calmann-Lévy, 1990（アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997 年）。

[27] *Dictionnaire d'André Breton*, sous la direction d'Henri Béhar, Paris, Classique Garnier, 2013.

に、シュルレアリスム研究所（le Centre de recherche sur le surréalisme）を立ちあげ、世界的な情報網をつくりあげている。年に一回刊行される研究雑誌『メリュジーヌ』は、2017 年に前年にスリジーで開催されたアンドレ・ブルトンの没後 50 年を記念するシンポジウムの記録集を刊行した後[28]、紙媒体での発行を終了し、電子版に移行した。電子版はシュルレアリスム研究所のホームページ（https://melusine-surrealisme.fr/wp/）で公開されている。

晩年のブルトンに出会い、シュルレアリスム運動に参加した作家たちは、現在でも独自の観点から研究を進めており、注目に値する。ジャン＝ミシェル・グティエはポンピドゥー・センターの大規模な回顧展「アンドレ・ブルトン、痙攣的な美」（1991 年）や「シュルレアリスム革命」展（2002 年）の企画に関わっただけでなく[29]、2003 年のブルトンのオークションの際にカタログを作成し[30]、また娘のオーブ・ブルトン＝エレウエがサイトをたちあげるのにも協力した（http://www.andrebreton.fr/）。このサイトのおかげで、今では分散してしまったブルトンやシュルレアリスムに関わる膨大な資料（書簡、原稿、作品、収集品、写真など）に自由にアクセスできる。シュルレアリスムを歴史化する 1991 年の回顧展に激しく反対する『誰何――シュルレアリスムの非アクチュアル性に関するアクチュアルな考察』（1991 年）を発表したアニー・ル・ブランは、生きた思想としてのシュルレアリスムを追究しつづけている[31]。そして、ジョルジュ・セバッグは『口にできない私が生まれた日：17 ンドレ・13 ルトン』（1988 年）、『口にできない彼の死んだ日：ジャック・ヴァシェ、1919 年 1 月』（1989 年）で、ブルトンの作品や実人生を連想と膨大な知識で繋げて解読していくという独自の方法を実践している。『崇高点――ブルトン、ランボー、カプラン』（1997 年）や『避雷針のついた絞首台――シュルレアリスムと哲学』（2012 年）など、重要な研究をコンスタントに発表しつづけている[32]。セバッグがマイケル・リチャードソンやドーン・エイ

---

[28] *Mélusine*, n° 37 « L'Or du temps, André Breton, cinquante ans après », Lausanne, L'Âge d'homme, 2017.

[29] *André Breton, La Beauté convulsive*, Paris, Centre Georges Pompidou, 1991 ; *La Révolution surréaliste*, Paris, Centre Georges Pompidou, 2002.

[30] *André Breton 42, rue Fontaine : tableaux modernes, sculptures, estampes, tableaux anciens*, Paris, Calmels Cohen, 2003 ; *André Breton 42, rue Fontaine : photographies*, Paris, Calmels Cohen, 2003 ; *André Breton 42, rue Fontaine : arts primitifs*, Paris, Calmels Cohen, 2003 ; *André Breton 42, rue Fontaine : Livres I*, Paris, Calmels Cohen, 2003 ; *André Breton 42, rue Fontaine : Livres II*, Paris, Calmels Cohen, 2003 ; *André Breton 42, rue Fontaine : manuscrits*, Paris, Calmels Cohen, 2003.

[31] Annie Le Brun, *Qui vive : considérations actuelles sur l'inactualité du surréalisme*, Paris, Pauvert, 1991. ル・ブランは 2016 年 9 月に来日し、東京で講演を行った。講演は『シュルレアリスムと抒情による蜂起　アンドレ・ブルトン没後 50 年記念イベント全記録』（塚原史・星埜守之・前之園望訳、京都、エディション・イレーヌ、2017 年）に収録されている。

[32] Georges Sebbag, *L'imprononçable jour de ma naissance, 17ndré 13reton*, Paris, Jean-Michel Place, 1988 ; Sebbag, *L'imprononçable jour de sa mort, Jacques Vaché, janvier 1919*, Paris, Jean-Michel Place, 1989 ; Sebbag, *Le point sublime : André Breton, Arthur Rimbaud, Nelly Kaplan*, Paris, Jean-Michel Place, 1997（『至高点 ――ブルトン、ランボー、カプラン』鈴木雅雄訳、水声社、2016 年）; Sebbag, *Potence avec paratonnerre : surréalisme et philosophie*, Paris, Hermann, 2012.

ズたちと一緒に監修した『シュルレアリスムの国際百科事典[33]』は 2019 年に出版される予定である。

シュルレアリスム美術に関する研究は、ヨーロッパではマックス・エルンストの実証的な研究で有名なウェルナー・シュピースなどが牽引してきたが、アメリカではロザリンド・クラウスやハル・フォスターら『オクトーバー』誌のグループが、シュルレアリスム美術の読み直しを行い、美術史においてシュルレアリスムを語る可能性を示した[34]。

シュルレアリスムに関連する資料の所蔵場所として、まずパリのパンテオン脇のジャック・ドゥーセ文学図書館とポンピドゥー・センターにあるカンディンスキー図書館が挙げられる。前者には、ブルトン、エリュアール、シャール、デスノス、ツァラなどの文学者を中心とした手書き原稿や書物、書簡、雑誌などが揃っている。1921 年からブルトンが（1922 年からはルイ・アラゴンも一緒に）図書館の方向性を決定するアドバイザーとしてジャック・ドゥーセに協力していただけあって、ダダ・シュルレアリスムの作家のコレクションは非常に充実している。ジャック・ドゥーセ文学図書館のホームページ（http://bljd.sorbonne.fr/）では電子化された豪華本（LivrESC）やジャリ、アポリネール、デスノスら詩人たちの原稿（ALMé）を閲覧することもできる。

一方のカンディンスキー図書館には、マン・レイ、ヴィクトル・ブローネル、ジョゼフ・シマら著名な芸術家のみならず、シュルレアリストたちのミューズ的な存在だったリーズ・ドゥアルムやユキ・デスノスまで含む貴重な資料が保管されている。芸術家によって量や内容は異なるが、たとえばマン・レイの場合、芸術家同士が交わした書簡、芸術家が出版社、美術館、画廊などと交わした書簡、スケジュール帳、私的な写真や経理関係の書類まで所蔵している。

パリ以外にも、ロンドンのテート・ライブラリー、ロサンゼルスのゲッティー・リサーチ・インスティテュートをはじめとした図書館で、関連書物、各作家の往復書簡等の原稿資料や展覧会関連資料などを閲覧することができる。シュルレアリスムはパリを起点に、ブリュッセル、ベオグラード、プラハ、サンタ・クルス・デ・テネリフェ、ロンドン、メキシコ・シティ、フォール・ド・フランス、ニューヨーク、東京、名古屋など様々な都市で展開したため、作り手の出身地に豊かな資料が残されていることが多い。たとえば、日本を代表するシュルレアリスムの詩人瀧口修造のアーカイヴは、瀧口の出身大学の慶応義塾大学アート・センターと出身地富山の富山県立近代美術館にあるが、前者の「瀧口修造コレクション」には、遺族から寄贈された書簡、手稿、画稿、ノート、スクラップブック、写真、収集物、書籍など、あわせて一万点を超える所蔵品がある。

---

[33] *The International Encyclopedia of Surrealism*, 3 volume set, London, Bloomsbury Publishing, 2019. 執筆には鈴木雅雄（早稲田大学）、永井敦子（上智大学）、谷口亜沙子（明治大学）、石井祐子（九州大学）も加わっている。

[34] Rosalind Krauss, *The Originality of the Avant-Garde and Other Modernism Myths*, Cambridge, The MIT Press, 1985 ; *Explosante-fixe. Photographie & surréalisme*, catalogue par Krauss, Jane Livingston et Dawn Ades, Paris, Centre Georges Pompidou, 1985 ; Hal Foster, *Compulsive beauty*, Cambridge, The MIT Press, 1993.

運動の核にいたブルトンが、死後 50 年経つまで書簡を刊行してはならないと「遺言」したため[35]、2016 年以降、最初の妻シモーヌ・カーンへの手紙やジャック・ドゥーセへの手紙をはじめ、ブルトンの書簡集が立て続けに刊行されている[36]。ブルトンの書簡に限らず、様々な場所で資料が蓄えられて出版され、研究機関や図書館のホームページでの公開が進んでいる現在の状況を鑑みると、テクストやグループの活動に関する新事実の掘り起こしや新たな知見の提示[37]、展覧会に関する実証的な研究などが[38]、今後益々行われることが期待される。

ところで日本のシュルレアリスム研究は、現在に至るまで世界的に見ても相当層が厚く盛んだと言える。研究スタイルや分析方法は異なるとしても、ブルトンの同時代人だった瀧口修造をはじめとして、巖谷國士、鈴木雅雄らを中心に、重要な研究がこれまでおこなわれてきた[39]。日本で出版されている書物、研究書、雑誌の特集の数と内容の充実ぶりは目を見張るほどだ[40]。日本で展開したシュルレアリスムに関する研究も 1990 年代から本格化

---

[35] 実はこの「遺言」の詳細はわかっていない。明確な形で意思が示されたわけではないという説もある。

[36] André Breton, *Lettres à Simone Kahn : 1920-1960*, présentées et éditées par Jean-Michel Goutier, Paris, Gallimard, 2016 ; Breton, *Lettres à Jacques Doucet : 1920-1926*, présentées et éditées par Étienne-Alain Hubert, Gallimard, 2016 ; Breton, *Correspondance avec Tristan Tzara et Francis Picabia : 1919-1924*, présentée et éditée par Henri Béhar, Gallimard, 2017 ; André Breton, Benjamin Péret, *Correspondance : 1920-1959*, présentée et éditée par Gérard Roche, Paris, Gallimard, 2017.

[37] 運動体やグループとしてのシュルレアリスムのあり方については、これまでジュール・モヌロ（註 20 であげた『超現実と聖なるもの』）、田淵晋也（『「シュルレアリスム運動体」系の成立と理論「離合集散」の論理』勁草書房、1994 年）、Norbert Bandier, *Sociologie du surréalisme, 1924-1929*, Paris, La Dispute, 1999 などが論じている。

[38] シュルレアリスムの展覧会に関する研究としては Lewis Kachur, *Displaying the Marvelous*, Cambridge, The MIT Press, 2001 がある。石井祐子（「ロンドン国際シュルレアリスム展（1936 年）にみる相隔たるもの同士の並置をめぐる諸問題」、『美学』64（1）、2013 年、143-154 ページ）や瀧上華（「神話の立ち現れる場所――フレデリック・キースラー「1947 年のシュルレアリスム展」の会場構成」『国立新美術館研究紀要』第 5 号、2018 年、36-53 ページ）もこの問題を扱っている。

[39] 瀧口修造の貴重な仕事のなかでもアンドレ・ブルトン『超現実主義と繪畫』の翻訳（厚生閣書房、1930 年）、『シュルレアリスムのために』（せりか書房、1968 年）の出版と『アンドレ・ブルトン集成』の監修（第 1 巻、第 3-7 巻、大岡信・阿部良雄・巖谷國士・生田耕作・瀧口修造訳、京都、人文書院、1970-1974 年）は見逃せない。巖谷國士は 1970 年半ばから現在に至るまで精力的に研究を発表している（巖谷國士『シュルレアリスムと芸術』河出書房新社、1976 年；巖谷國士『ナジャ論』白水社、1977 年；ブルトン『ナジャ』巖谷國士訳、岩波書店、2003 年；巖谷國士『〈遊ぶ〉シュルレアリスム』平凡社、2013 年）。1990 年代後半からの鈴木雅雄の活躍ぶりは著しい（『シュルレアリスムの射程』せりか書房、1998 年；鈴木雅雄『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』平凡社、2007 年）。さらに、塚原史（『ダダ・シュルレアリスムの時代』筑摩書房、2003 年）、永井敦子（『クロード・カーアン　鏡のなかのあなた』水声社、2013 年）、齊藤哲也（『零度のシュルレアリスム』水声社、2011 年）らの活躍も特筆に値する。

[40] 東海林洋編「主要文献」（『シュルレアリスム展――パリ、ポンピドゥセンター所蔵作品による――』国立新美術館、2011 年、242-246 ページ）には日本語で読める書誌情報が詳しく載っている。

している[41]。加えて、これまで主に文学研究者が中心になって進められてきたシュルレアリスム美術の研究に、新しい動きがでていることは注目に値する。シュルレアリスム美術を研究対象とする若手の美術史研究者が活躍しはじめている。2016 年に発足した「シュルレアリスム美術を考える会」（代表はイヴ・タンギー研究者の長尾天）はこの動向を象徴している[42]。

＊＊＊

最後に、シュルレアリスムとアール・ブリュットにとって重要な霊媒に関する最近の研究を紹介したい。ふたつの芸術運動は、洗練された表現よりも原石のような素材のままの瑞々しい表現を高く評価するという美意識が共通している。よく知られているように、当時「グロテスク」とみなされていた精神疾患の患者や霊媒の作り出す自由な表現をいち早く評価したのが、パリでダダイストとして活動していた後のシュルレアリストたちである。1922 年に画家エルンストがケルンからパリに持ちこんだプリンツホルンの名著『精神病者はなにを創造したのか』は、彼らに大きな衝撃を与えた。アール・ブリュットの提案者デュビュッフェも同じ時期に同書を読んで感動したと述べている。ブルトンらは運動発足時に、精神分析、心理学、神経医学などの最新の科学成果を参照するのみならず、心霊主義にも興味を持ちながら、オートマティスムの可能性を多方面から探究していた。シュルレアリストたちの初期の試みについては、ファビエンヌ・ユラック編『シュルレアリスムの実験における狂気と精神分析[43]』（1992 年）や中田健太郎「理論の見る夢――オートマティスムの歴史[44]」（2012 年）が詳しい。またレスケたちが編纂した『シュルレアリスムと狂気[45]』（2009 年）もこの問題を取りあげている。

狂気に限らず霊媒性は、シュルレアリスム、アール・ブリュットの双方にとって重要な問題であるが、美術史においても 2010 年くらいから霊媒芸術に関する研究が盛んになった[46]。その流れで注目されているのがロベール・デスノスとヴィクトル・ユゴーである。デスノスは催眠状態に入る才能に優れており、シュルレアリスム運動発足前に行われていた自動記述の実験で活躍したことで知られているが、ジャック・ドゥーセ文学図書館に保管されている彼のオートマティックなデッサン 51 枚を印刷した美しいファクシミリ版の書物が 2015 年に出版された[47]。ヴィクトル・ユゴーが降霊術に入れ込んでいたことは稲垣直樹『ヴ

---

[41] 註 40 であげた「主要文献」に加えて、速水豊『シュルレアリスム絵画と日本――イメージの受容と創造』（NHK 出版、2009 年）が参考になる。

[42] 2015 年発足の関西シュルレアリスム研究会でも、文学研究者に混ざって美術史と美学の若い研究者が活躍している。

[43] *Folie et psychanalyse dans l'expérience surréaliste*, catalogue sous la direction de Fabienne Hulak, Nice, Z'éditions, 1992.

[44] 『思想』10 月号「シュルレアリスムの思想」岩波書店、2012 年、26-59 ページ。

[45] Thomas Röske, Ingrid von Beyme, *Surrealism and Madness*, Heidelberg, Sammlung Prinzhorn, 2009.

[46] それ以前の研究として *Art spirite, médiumnique, visionnaire, messages d'outre-monde*, catalogue par Martine Lusardy, Michel Thévoz, Roger Cardinal, *etc*, Paris, Hoëbeke, 1999 がある。

[47] Robert Desnos, *Dessins hypnotiques*, édition établie et présentée par Carole Aurouet, Paris,

ィクトル・ユゴーと降霊術』（水声社、1993 年）がすでに明らかにしている。ユゴーの残した見事なデッサンは『ヴィクトル・ユゴー、幻視者のヴィジョン[48]』（2008 年）などで研究されている。パリのヴィクトル・ユゴー記念館では、シュルレアリスムとユゴーを結びつける展覧会やユゴーとアール・ブリュットを結びつける展覧会が行われている[49]。これはこの美術館に限ったことではない。特に 2010 年頃からユゴー、シュルレアリスム、アール・ブリュットを同じ流れとして扱う展覧会や研究が相次いでいる[50]。これはユゴーのデッサン研究が進められていることとも関連するだろうが、おそらくアール・ブリュット研究がシュルレアリスムを「許した」こととも無関係ではないだろう。この問題は画家クレパンに関する拙著でも取り上げたが、ある作り手がアール・ブリュットなのか、シュルレアリストなのかという判断を下すことは非常に難しい。実際、クレパンやルサージュをはじめ多くの作り手がそれぞれの陣営に属する人物として取りあげられた。もともとワイン商だったデュビュッフェは商標や統制銘柄のように、アール・ブリュットを自分のコレクションに限定した。対するブルトンはシュルレアリスムというレッテルを無効にするという目的で、様々な流派やジャンルの作品を並置したり引用したりした。厳密なデュビュッフェと鷹揚なブルトンは衝突したため、テヴォーがアール・ブリュット・コレクションの館長を務めていた時代には、アール・ブリュット研究ではシュルレアリスムが好意的に扱われることはあまりなかった。だが、デュビュッフェの構想に対する反省的な視点が導入されるようになってから[51]、次第にシュルレアリスムに対しても研究の関心が向けられるようになったといえる。

他方で、霊媒芸術の研究が進んでいる背景として、フランスの心霊主義の研究の進展も軽視できない。降霊会で霊媒が死者の言葉を伝える近代の心霊主義が起こったのは 19 世紀半ばである。1848 年、ニューヨーク州の村で起こった不思議な現象が噂で広がり、ヨーロッパにもすぐに波及し、フランスでは 1850 年くらいから、ユゴーや天文学者フラマリオンや犯罪学者ロンブローソなどを大いに魅了した。アラン・カルデックが心霊主義を科学的宗教として理論化し、20 世紀初頭に流行のピークを迎えた。アール・ブリュット研究ほど

Jean-Michel Place, 2015. デスノスを取りあげた最近の研究として Elisa Amaru et Odile Alleguede, *Artiste médium*, Escalquens, Trajectoire, 2014 がある。

[48] *Victor Hugo : Dessins visionnaires*, Milan, 5 Continents, 2008.

[49] *Entrée des médiums, spiritisme et arts de Hugo à Breton*, Paris, Maison Victor Hugo, 2013 ; *La cime du rêve, les surréalistes et Victor Hugo*, Paris, Maison Victor Hugo, 2013 ; *Louis Soutter, Victor Hugo, dessins parallèles*, catalogue par Gérard Audinet, Julie Borgeaud, Paris, Maison de Victor Hugo, 2015 ; *La folie en tête. Aux racines de l'art brut,* catalogue sous la direction de Gérard Audinet, Barbara Safarova, Savine Faupin, *etc*., Paris, Flammarion, 2018.

[50] *Hypnos : images et inconscients en Europe (1900-1949)*, Villeneuve-d'Ascq, Musée d'art moderne Lille Métropole, 2009 ; *L'Europe des esprits ou la fascination de l'occulte, 1750-1950*, Strasbourg, Musée d'art moderne et contemporain de Strasbourg, 2011 ; *André Breton & l'art magique, Yüksel Arslan*, Villeneuve-d'Ascq, Lille métropole, musée d'art moderne, d'art contemporain et d'art brut, 2017.

[51] Anne Boissière, Christophe Boulanger, Savine Faupin, *etc*., *Mythologies et mythes individuels, à partir de l'art brut,* Villeneuve-d'Ascq, Presses universitaires du Septentrion, 2014.

の進展は見せていないものの、フランスの心霊主義に関する研究書は 1990 年代から発表されており[52]、フランスの心霊主義を代表する理論家カルデックの主要な著書は 2000 年代後半から復刊されて入手しやすくなった[53]。250 枚もの心霊写真を展示した記念すべき展覧会『第三の眼――写真とオカルト[54]』（ヨーロッパ写真美術館、2004 年）はニューヨークのメトロポリタン美術館にも巡回し、大きな話題を呼び、心霊主義研究の進展にも寄与した。

以上、限定的ではあるけれども、アール・ブリュット、シュルレアリスムに関する研究の簡単な歴史と現状の見取り図を提示した。研究の歴史の浅さにもかかわらず、文献学的な研究の蓄積は驚くべきペースで進んでいる。さらに重要なのは、いずれの研究においても脱領域的な動きがみられることだ。アール・ブリュット研究とシュルレアリスム研究、ひいては美術研究と文学研究がそれぞれの観点や問題意識を持ち寄って交流する機会はこれから一層多くなると考えられるが、その動きのなかで、アール・ブリュットとシュルレアリスムの重なり合う地帯に位置する霊媒芸術の研究はひとつの重要なテーマとなることが期待される。

（京都産業大学准教授）

[52] Christine Bergé, *La Voix des Esprits, ethnologie du spiritisme*, Paris, Édition Métailié, 1990 ; François Laplantine et Christine Aubrée, *La Table, le livre et les esprits, naissance et actualité du mouvement social spirite entre France et Brésil*, Paris, J. C. Lattès, 1990 ; Pascal Le Maléfan, *Folie et Spiritisme, Histoire du discours psychopathologique sur la pratique du spiritisme, ses abords et ses avateurs (1850-1950)*, Paris, L'Harmattan, 1999 ; Guillaume Cuchet, *Les Voix d'outre-tombe*, Paris, Seuil, 2012. 日本語で読める主要な研究としては、稲垣直樹『フランス〈心霊科学〉考』（京都、人文書院、2007 年）がある。

[53] Allan Kardec, *Le Livre des Médiums*, Paris, Philman, 2007 ; Kardec, *Le Livre des Esprits*, Philman, 2009 ; Kardec, *Instruction pratique sur les manifestations spirites*, Paris, Bussière, 2013.

[54] *Le Troisième œil, la photographie et l'occulte*, catalogue par Clément Chéroux, Andreas Fischer, *etc*., Paris, Gallimard, 2004.